

# ECMトップベンダーにおける 導入事例研究

(第10回ECMオープン研究会)

## 開催レポート

2011年5月

社団法人 日本画像情報マネジメント協会 ECM委員会

# 第10回ECM研究会

## ～ ECMトップベンダーにおける導入事例研究～

主催	社団法人 日本画像情報マネジメント協会 ECM委員会
開催日時	2011年2月19日(木)13:30 - 17:10 (受付開始 13:00～)
会場	CANON HALL S (キヤノン・ケティンゲジャパン本社) 東京都港区港南2-16-6 キヤノン S タワー (JR品川駅港南口より徒歩8分)

### Program

13:30～13:40	開催挨拶	JIIIMA ECM委員会 委員長 梅原 寿夫
<b>第1部 ECMトップベンダーにおける導入事例研究</b>		
13:40～14:00	<b>EMC Documentum</b> プラント/エネルギー業界 コンテンツマネジメント ソリューション 取り組みのご紹介	EMCジャパン株式会社 山神 憲司 氏 インフォメーション・インテリジェンス事業本部長
14:00～14:20	<b>Open Text ECM Suite</b> 製造業 ECM&業務システム連携による 全体最適化	オープンテキスト株式会社 入江 宏 氏 ECM&SAP 営業本部ソリューション開発部
14:20～14:40	<b>OnBase</b> ヘルスケア(病院・医療) 電子カルテシステム連携 統合コンテンツ管理ソリューション	ハイランドソフトウェア株式会社 金井 芳美 氏 営業部 アカウントマネージャー
14:40～15:00	<b>IBM FileNet</b> 保険業界 コンテンツ指向型プロセス管理による 業務効率化(新契約及び支払業務)	日本アイ・ビー・エム株式会社 水越 将巳 氏 ソフトウェア事業 ECMクライアント・テクニカル・プロフェッショナル
15:00～15:20	<b>Oracle ECM</b> 製造業 取引企業とのセキュアな 情報共有基盤	日本オラクル株式会社 清水 照久 氏 Fusion Middleware事業統括本部 ビジネス推進本部 シニアディレクター
15:20～15:30	休憩	
<b>第2部 パネルディスカッション</b>		
15:30～17:00	モデレータ	株式会社ハイパーギア 代表取締役 本田 克己 氏
	パネラー	EMCジャパン株式会社 山神 憲司 氏 オープンテキスト株式会社 入江 宏 氏 ハイランドソフトウェア株式会社 金井 芳美 氏 日本アイ・ビー・エム株式会社 水越 将巳 氏 日本オラクル株式会社 清水 照久 氏
17:00～17:10	閉会挨拶	JIIIMA 副理事長 佐藤 伸一
	司会進行	JIIIMA ECM委員会 佃 浩太郎

## 第10回ECM研究会

### ～ ECMトップベンダーにおける導入事例研究～

### 開催報告レポート

2011年2月24日(木)、東京都品川のCANON HALL SにおいてECMベンダー5社による「ECMトップベンダーにおける導入事例研究」(第10回ECM研究会)が開催された。

本レポートでは、当日のスケジュールに沿って「ECMトップベンダーにおける導入事例研究」の開催内容を報告する。

#### <開催挨拶>

社団法人 日本画像情報マネジメント協会 ECM委員会委員長 梅原 壽夫 氏



開催にあたって、社団法人 日本画像情報マネジメント協会(以降、JIIMA) ECM委員会委員長 梅原 壽夫氏による挨拶、ECM委員会の活動内容と開催趣旨が説明された。

JIIMA ECM委員会は、ECMの普及・啓発活動を始め、ECM研究会の開催、ポータルサイトの運営、市場動向調査といった諸活動を行っている。

2008年から開催してきたECM研究会は今回で第10回目となる。開始当初である2008年時点では、参加

者のECMに対する認知度が10%に満たない状態であった。しかし、2008年はECMの基本概念、2009年はECMの活用方法、2010年にはECMの戦略動向・ECMサミットという内容でECMの普及・啓発活動を継続して開催した結果、昨年のe-ドキュメントJAPANの来場者アンケートではECMの認知度は50%を越えるまでになった。

今回のセミナーは、前回のECMサミット2010にも参加したECMトップベンダーによる導入事例の紹介となる。

なお、今回のセミナーで使用したプレゼンテーション資料は、2月28日よりECMポータルサイトでダウンロードが可能となっている。

## < 第 1 部 ECM トップベンダーにおける導入事例研究 >

第 1 部では、5 社の ECM ベンダーが各業界における導入事例についてプレゼンテーションを行った。

### EMC Documentum プラント/エネルギー - 業界

「コンテンツマネジメントソリューション 取り組みのご紹介」

EMC ジャパン株式会社 山神 憲司 氏



EMC ジャパンが紹介する事例は、プラント/エネルギー業界における事例となる。

プラントエンジニアリングにおける特徴として、まずプロジェクトが非常に大規模であることが挙げられる。ひとつのプラントを作るためには数十万～百万のドキュメントが必要となる。また、もうひとつの特徴として、社会インフラや場合によっては人命に関わる設備となるため、レギュレーション(法規制)が厳しいことを挙げた。また、

数十年という長期に渡って維持・管理をしていく必要があることため、ドキュメントの長期保管も要件として求められる業界である。本日紹介するユーザー事例は、プラント/エネルギー業界向けソリューションの中で、設計～建築～竣工までを行う EPC Phase(Engineering, Procurement, Construction)に適用した事例にあたる。

同ユーザーにおける導入の背景は、国際的な競争の激化や外国企業との協業、膨大なドキュメントの管理といったグローバルビジネス展開に向けたもの、課題はフェーズや部門によりドキュメントの管理ルールがバラバラであることや国内・海内のレギュレーションを用意に満たせないといった点となる。

前述の背景/課題を満たすために、社内外にまたがったコンテンツマネジメントシステムの構築を行った。同システムの導入により、品質管理の強化(競争力強化)や文書の再利用・流用(業務効率化)、文書保管コスト抑制(コストダウン)といった効果が得られた。

今後の課題としては、過去に作成された紙文書の電子化、引継ぎプロセスの効率化を挙げている。

今後、EMC ジャパンでは、業界向けに特化したソリューションレームワークを用意することにより、少ないカスタマイズで短期間に導入できるソリューションの展開を予定している。

製品 URL:

<http://japan.emc.com/products/family/documentum-family.htm>

## OpenText ECM Suite 製造業

「ECM&業務システム連携による全体最適化」

オープンテキスト株式会社 入江 宏 氏



オープンテキストは、製造業における事例を紹介した。

まず、本日のテーマを選択した理由として、多くの企業で ERP などの基幹系システムで扱う構造化データと ECM で扱う非構造化データが分断されている現状を挙げた。

多くのユーザーにおいて構造化データと非構造化データが分断されていることにより、業務に非効率が発生している。本日紹介する事例もこのケースに当てはまることから、どのよう

に課題を解決したかを紹介していくと述べた。

SAP/ERP を導入している製造業 A 社に対して導入前にヒアリングを行った結果、業務プロセスの改善は図れているものの業務は変わらず、現場の負荷・コストばかり増え続けている (CIO)、システムの増加はトレーニング・クレームの増加、人が足りない (情報システム部門)、全てのエビデンスがなかなか揃わない (監査室・内部統制室)、結局人に聞いたほうが早い (SAP ユーザー、経理・購買部門)、各部署からの問い合わせが多発している (Non SAP ユーザー、営業・工場・研究所) 使いづらい、などさまざまな部門からさまざまな課題が挙げられた。

つまり、ERP に集約されている構造化データと ECM に格納されている多くの部署が関わり点とするさまざまな非構造化コンテンツの間に立ちふさがる断裂が問題となっている。この断裂をどうつなげるか、つなげることによりどうやって効率化するかが一番の課題であった。

ユーザーに提案した 100 を超える RFP の中から、前述の課題を解決するためのチェックポイントとして、ERP と ECM はシームレスに連携できるか、ユーザーが使いなれた GUI からすぐにアクセスできるのか、増え続けるデータ量に対する対策を出来ているか、適切な文書管理基盤を有しているのか、という 4 つを紹介した。

ECM 導入により課題を解決したユーザーは今後、ERP-ECM 連携の利用範囲の拡大、集めた情報の利用・活用・モバイルのさらなる利用・活用などの拡張プランを検討している。

製品 URL:

<http://www.opentext.jp/jp/sol-products/sol-pro-open-text-ecm-suite.htm>

## OnBase ヘルスケア(病院・医療)

「電子カルテシステム連携統合コンテンツ管理ソリューション」

ハイランドソフトウェア株式会社 金井 芳美 氏



ハイランドソフトウェアは、病院における事例を紹介した。

病院システムにおいて ECM がどのように活用されているかについて説明するために本事例を選んだ。

Cleveland Clinic はオハイオ州クリーブランド市にある心臓病の治療で権威のある病院である。病院や病院に関連した施設など 60 以上の施設を持っており、海外展開も行っている。

導入の背景として、同病院には電子カルテシステムを導入しており、

540 万人以上の患者記録が登録されている。しかし、電子カルテシステムに登録・データ化されない情報は電子文書や紙文書で別に存在しており、併用した診療記録管理を行っていたため、情報の共有が困難で、病院間の情報のやりとりにリソース・コストを費やしていた。

この非効率的な部分を解決するために、ECM に診療記録情報を集約し、電子カルテシステムから参照可能な状態を確立することで、病院全体で統制・標準化を図る。つまり、ECM と電子カルテシステムの連携により、インターオペラビリティ(相互運用性)を実現することが望まれていた。

システム導入にあたって、ユーザー自らリサーチを行い、他病院で導入されている OnBase と電子カルテシステムの導入事例を見学、分析した。その結果、紙文書を取り込む際には集中スキャンが適している、処理が完了した最終系の文書を ECM システムに取り込む、ECM と電子カルテシステムでそれぞれ何ができるかを十分に理解して最善のモデルを確立する、などのポイントを学んだ。

OnBase/Epic 連携ソリューションと OnBase/HL7 ソリューションの導入により、利用ユーザー数が約 2 万ユーザー、1.4TB のディスク容量、710 万件の診療記録を管理するシステム構築を実現した。OnBase の導入によって、病院内に存在するシステム間の隙間を埋め、適切な情報を適切なタイミングと場所で利用できる、診療記録に関する情報を電子カルテシステムからアクセスできる、記録管理部門の人員を削減できた、などさまざまな導入効果が得られた。

今後は、DICOM (Digital Imaging and Communication in Medicine)への対応や経理・人事などバックオフィス部門への展開を計画しているという。

製品 URL:

<http://www.onbase.jp/onbase/index.html>

## IBM FileNet 保険業界

「コンテンツ指向型プロセス管理による業務効率化(新契約及び支払業務)」

日本アイ・ビー・エム株式会社 水越 将巳 氏



日本アイ・ビー・エムは、保険業界における導入事例を紹介した。

冒頭に、保険業務で扱われる代表的なコンテンツの種類(紙、イメージ、FAX、メール、画像、電話、マニュアル、約款など)について触れ、どのコンテンツも業務遂行の意思決定に欠かすことができない情報であり、漏洩や紛失すると企業責任を問われる重要な情報であることを説明した。

前述したほとんどのコンテンツは業務プロセスから参照(利用)されており、多くの業務が紙を利用した業務を行っていること、密接に関連した業務プロセスとコンテンツの管理を行うコンテンツ指向型プロセス管理という考え方が注目されていると述べた。

コンテンツ指向型プロセス管理の導入事例として、生命保険会社の新契約プロセスを挙げた。導入前は、紙で扱うことによる業務の遅延や紛失のリスク(紙の扱いと原本管理)、手作業で査定するため時間がかかる(審査・査定業務)、進捗状況が分からず問い合わせに対応できない(業務の可視化)などの問題が各プロセスで発生していた。コンテンツ指向型プロセス管理を導入したことにより、システム上から検索とイメージを参照できるようになった(紙の扱いと原本管理)、ルールエンジンを利用した自動査定を行い日とによる判断が必要なものだけを査定すれば済むようになった(審査・査定業務)、進捗状況をリアルタイムに把握できるようになった(業務の可視化)など各プロセスで課題となっていたポイントは改善され、大きな効果を挙げている。

最後に、時代のニーズとともに進化し続ける ECM の新しい活用例として、3 つの活用例を挙げた。eDiscovery(電子情報開示)対応は企業が正しくコンテンツ管理を行い海外における訴訟に備えること、コンテンツ・アナリティクス(分析)はコンテンツに含まれるテキスト情報を分析することによりトレンドの把握や問題の早期発見・迅速な対応に役立てること、アドバンスド・ケース・マネジメント(ACM)は業務に必要な情報をケースに集約し管理・活用すること、と説明しコンテンツ管理に対するニーズは日々進化し続けているとまとめた。

製品 URL:

<http://www.ibm.com/jp/software/data/ecm>

## Oracle ECM 製造業

「取引企業とのセキュアな情報共有基盤」

日本オラクル株式会社 清水 照久 氏



日本オラクルは、製造業における取引企業とのセキュアな情報共有基盤について説明した。

オラクルでは、構造化データ・非構造化データを問わず情報はすべてデータベースの中に入れるというのが根本的な考えである。

始めに、根本的な考えやなぜコンテンツ管理ソリューションを提供しているのかという戦略と背景について触れた。

オラクルの戦略として、Complete (網羅的な製品の提供)、Open (標準技術に準拠)、Integrated (製品間連携の強化) という3つのテーマから製品提供を行っている。すべての情報をデータベースで守りながら、前述の3つ観点でソリューション提供を行っており、コンテンツ管理ソリューションはそのひとつに位置づけられている。

今回紹介するのは製造業での事例をシンプルにまとめたものだが、あらゆるケースで役立つものだと述べた。

導入の背景としては、社外との情報共有をいかにして行うか。社内イントラネットだけでファイル共有を行うことは問題なく運用できていた。しかし、社外との情報共有をする段にあたり、データの整合性やいかにトラッキングを行うかなどの問題が出てきた。また、システムを構築するにあたり、ネットワーク上のセキュリティ対策、ファイルのアクセス制御、社外に配布された後のファイルの制御という3つの課題も挙がってきた。

前述の3つを統合的に管理しつつも、ユーザーはシンプルに使いたいという要求を実現するために、Oracle UCM の他、Information Rights Management、Virtual Directory などのトータルソリューションで構築を行った。

今回紹介した事例は、全社的な利用で規模が大きい事例だが、製造業に限らずさまざまな業種に適用できる事例だと考えている。

製品 URL:

<http://www.oracle.com/jp/products/middleware/content-management/index.html>

第一部で使用された各社のプレゼンテーション資料は下記の URL からダウンロード可能。

URL: <http://www.ecm-portal.jp/down/index.html>

## <第2部 パネルディスカッション>

モデレーター：株式会社ハイパーギア 代表取締役 本田 克己 氏

第2部は、第1部でプレゼンテーションを行ったECMベンダー5社によるパネルディスカッションとなった。

全部で5つのテーマについて、1時間30分に渡るパネルディスカッションを行った。



### テーマ 1

「顧客事例 6ポイント」

いろいろな会社の事例をひとつの切り口で比べることは有効な分析となる。テーマ1では、顧客事例を紹介する際の6つのポイントと題して、第1部でプレゼンテーションを行った事例に対して、成功事例に至るまでのきっかけを中心に比較を行った。

- 悩み
- きっかけ
- 躊躇
- 解消
- 最後の決め手
- 使ってみて

最初に、EMC ジャパンが紹介したプラント/エネルギー業界の事例にあてはめて分析を行った。

- 悩み
  - 長期間にわたって大量の文書を保管しなくてはならない。
  - 紙文書をベース手作業で管理していたが、海外展開には対応しきれない。
- きっかけ
  - 海外で製品を知ったユーザーからコンタクトがあった。
- 躊躇
  - 関係するステークホルダーが多く調整が必要。
  - 業務が変わることに対する躊躇があった。

- 解消

検討の際にユーザー側にリーダーシップを発揮する人物がいたため、導入が進んだ。

- 最後の決め手

検討しているユーザーを同じ形態で利用している導入ユーザーの元に連れて行き、直接話を聞いてもらった。

- 使ってみて

レギュレーション対応に関してはいろいろと苦労する面があったがうまく導入できており、将来的な拡張を検討している。

近年では、中国の企業へ導入も進んでおり、横展開の全社導入を検討するユーザーも出てきている。今後、グローバルにビジネスを行う輸出関連企業(インフラ関連など)にとって ECM の導入が有効であるとまとめた。

続いて、オープンテキストが紹介した製造業における ERP との連携事例について、同じく 6 つのポイントで分析を行った。

- 悩み

SAP/ERP を導入したが、うまく回らない。

コンプライアンスの観点から、エビデンスの管理が必要。

同様な受注の際に再利用できるように ECM を全社導入したい。

- きっかけ

情報システム部門が ECM の一部の機能(紙の電子化、アーカイブ)に興味をもった。

その後、CIO に OpenText ECM Suite の拡張性を説明し、有用性を納得してもらった。

- 躊躇

既存システムからの移行や他システムの検討があった。

特にコスト面でも既存システムのバージョンアップが驚異だった。

- 解消

SAP との親和性

既存システムからの移行ツールの提供を行った

トップに全体像を説明して納得を得た。

- 最後の決め手

ERP/ECM の連携実績

使い慣れた GUI から使える

増大するデータ量に対処できる

- 使ってみて

GUI を評価する声が多い。企業内で IT リテラシーには差があるため、ユーザーに合わせて WebDAV を使ったエクスプローラーライクな使い方とクライアントアプリケーションをインストールして使用する両方を併用できる。

日本企業の導入事例ではあるが、CIO が全世界の拠点への展開を考えていたため、部分的に安く導入できる既存システムのバージョンアップよりも、拡張性を重視した全社展開が可能なオープンテキストに軍配があがった、という最後の決め手が非常に印象に残った。

次に、日本オラクルが紹介した製造業における取引企業とのセキュアな情報共有基盤の事例について分析を行った。

- 悩み
  - 社内、社外と効率的、かつ「セキュアに」ファイル共有を行いたい。
- きっかけ
  - 既存の仕組み(手動でセキュリティ証明書配布、アクセス権管理)の運用が限界に来ていた。
- 躊躇
  - 複数の製品を組み合わせる事による、ユーザビリティの低下。
- 解消
  - 製品そのものを使うのではなく、基盤として採用することでユーザビリティを確保。
- 最後の決め手
  - ECM 製品(Oracle UCM)を中心にしたデモンストレーションが、業務にあっていた。
- 使ってみて
  - 別部門でも採用の可能性あり。

紹介したユーザーは、すでにいろいろな製品を導入していた。複数の製品を連携させていたためシステムが複雑化していたため、基盤としてシステムを導入するという決断に至ったという。文書管理システムは、導入が簡単だが移行が大変であるという問題点をあげ、基盤として導入できる ECM との違いを指摘した。

日本アイ・ピー・エムの保険業界向けの新契約システムの事例について分析を行った。

- 悩み
  - 紙を使ったオペレーションと不十分なコンテンツ管理により業務効率化が低下し、情報の紛失・漏洩などのリスクを増大させている。
- きっかけ
  - 保険法改定や金融庁からの指摘。会社をあげた業務改善への取り組み。
- 躊躇
  - ECM 導入によりどのような効果があるかがわからないことによる躊躇
- 解消
  - Business Value Assessment 実施による業務課題の洗い出し、ソリューション導入による ROI の提示など、効果とビジョンを明確にする。
- 最後の決め手
  - 現在の課題だけを解決する(もしくは、業務だけの課題を解決する)ポイントソリューションではなく、将来にわたり業務拡張(適用範囲の拡張)が可能な ECM プラットフォームの提供。ロードマップの提示。
- 使ってみて
  - 適用業務の横展開(たとえば、新契約業務から支払業務へ拡張...など)

本事例は、導入にあたりコンサルティングを行って業務を分析し、継続した改善を行っていくコンテンツ指向型プロセス管理のアプローチを分かりやすく説明している。法規制への対応による影響や業界としてコンテンツ管理に対する意識の高さにも言及している。

ハイランドソフトウェアが紹介した病院における電子カルテシステム連携統合コンテンツ管理の事例について、同様に分析を行った。

- 悩み
  - 電子カルテシステムだけではすべての診療記録を管理できない。
- きっかけ
  - ECM を導入し、電子カルテシステムと連携されることによりすべての診療記録の管理を行う。
- 躊躇
  - 電子カルテシステムには多くのフォーム(4,000 種類)があるため、分類が難しい。
- 解消
  - フォームの分類を行うために委員会を設置した。
- 最後の決め手
  - 導入事例の分析
  - ニーズに適合したソリューションの有無
- 使ってみて
  - 電子カルテシステムと ECM の連携による診療記録の管理システム実現(業務効率化、管理コストの削減など)

日本国内でも電子カルテシステムの導入は進んでおり、大学病院や大規模な病院では電子カルテシステムと ECM を連携された導入事例が出始めてきている。今後、日本でも電子カルテシステムと ECM の連携システムを導入する動きが本格化する見通しである。

5 社の ECM ベンダーの事例を 6 つのポイントで一通り比較を行ってきたが、その中から要点やキーワードを抜き出してまとめを行った。

## テーマ 2

「ECM 導入のきっかけは？」(まとめ)

---

紹介された導入事例の中から、ECM 導入のきっかけに関するキーワードを抜き出し、ベンダーごとに多く当てはまるものを挙げていった。

- 紙業務がまわらない？
  - EMC ジャパン、オープンテキスト、日本アイ・ピー・エム
- セキュリティニーズ？
  - オープンテキスト
- 全社的業務改革？
  - オープンテキスト
- ERP 導入？、基幹系システムとの連携
  - オープンテキスト、ハイランドソフトウェア

- 海外展開？  
EMC ジャパン、オープンテキスト
- レギュレーションへの対応  
EMC ジャパン
- ファイルサーバにドキュメントを貯めているが、限界を感じた  
ハイランドソフトウェア
- 同業他社が導入したため  
ハイランドソフトウェア
- 検索がしづらい、データが見つからない  
日本オラクル
- コスト削減  
日本アイ・ピー・エム、日本オラクル
- 今までとは異なる部門への導入を進める (web コンテンツ管理)  
日本オラクル

共通するキーワードもあれば、独自のキーワードも出てきていることから、ベンダーごとにさまざまなアプローチを行って ECM の導入を進めていることがうかがえる。

### テーマ 3

#### 「ECM 導入時の比較対象」

---

次に、ECM 導入時の比較対象についてまとめを行った。

(EMC ジャパン、日本オラクル、日本アイ・ピー・エムが回答)

- 文書管理システム？  
日本アイ・ピー・エム
- ファイルサーバ？  
日本アイ・ピー・エム、
- 他社 ECM？  
EMC ジャパン、日本オラクル、日本アイ・ピー・エム、
- 開発システム？  
EMC ジャパン、日本オラクル、日本アイ・ピー・エム、

すべてのベンダーが開発システム (内製システム) を一番の比較対象として挙げている。単一の業務や狭い適用範囲で比較した場合、構築期間、コスト面で開発システムに優位性がある。ECM を提案する際には、将来性や拡張性を含めた提案を行い、ユーザーから理解を得ることが重要である。

## テーマ 4

### 「文書管理システムとの関係」

---

テーマ 3 とも関連するが、ECM と文書管理システムの関係について  
(オープンテキスト、ハイランドソフトウェア、EMC ジャパンが回答)

- 移行ビジネスを考えていく？
- (文書管理せず)はじめてから導入していく？
- ECM に足りないものは？

まず、ハイランドソフトウェア、オープンテキストともに文書管理システムと比較されることは往々にしてあることと回答し、アプリケーションとの連携やグローバル展開や拡張性を考慮すれば文書管理システムと ECM には違いが出てくる点を説明した。今後、ユーザーの ECM に対する理解度が高まれば、誤解やミスマッチは減っていくだろうと述べた。

また、ECM に足りないものとして、モデレーターである本田氏が、GUI・インターフェースを指摘した。日本の文書管理システムではサムネイル表示やバインダ、キャビネットなどユーザーになじみにやすい GUI・インターフェースが採用されている製品があり、ECM 製品ではみられない特徴となっている。この点について、ユーザーからの要望の有無などについて質問した。

3 ベンダーともに、GUI・インターフェースについてユーザーから質問は受けることはあり、業務上必要であれば、カスタマイズで対応を行っていると回答した。また、GUI・インターフェースにこだわる点は日本のユーザーの特徴であり、北米などではあまりみられない特徴である点の指摘もあった。

## テーマ 5

### 「今後の方向性」

---

テーマ 4 の GUI・インターフェースに関する話題から、今後の方向性のひとつであるスマートデバイスとクラウドビジネスへと話が移った。

- スマートデバイス(iPad 等)の影響は？
- クラウドビジネスはどう影響する？

5 社すべての ECM ベンダーが、スマートデバイスへの対応を進めている点、経営層へのデモンストレーションや業務へ積極的に活用することにより、ECM 市場を活性化する要因となるという見解を示した。

ただし、課題としてセキュリティ対策やネットワークインフラが未整備な地域での利用を挙げ、どの業務に対して導入するかを慎重に見極める必要があるとまとめた。

パネルディスカッションの最後に来場者から、ECMベンダーが協力して経営層に対してECMの有用性を伝える情報発信を行うなどのデマンドクリエーションを行って欲しいという要望が挙がった。

日本におけるECM市場を拡大するためには、ベンダー、パートナーが協力して啓発活動を行い、ECMという言葉の認知度をあげ、市場の活性化を行うことが重要であるという共通認識を持ち、パネルディスカッションは終了となった。

### <総括>

JIIMA 副理事長 佐藤 伸一 氏



閉会にあたって、JIIMA 副理事長 佐藤 伸一 氏が第 10 回 ECM 研究会 2010 の総括を行った。

AIIM が 2010 年に発表した米国における ECM の状況について調査結果を説明した。

「企業規模での管理を完成、実施中」という回答が 40%、「部門レベルでの管理」という回答が 39%、「行っていない」という回答が 21%(そのうち、計画もないという回答は 5%)となっている。あわせて、「組織に文書と

記録の管理にあたる取締役レベルの責任者がいない」という回答が 36%となっており、日本と比較すると米国は情報管理に対する意思が高いことは指摘した。

ECM の最も重要な駆動力として、最も回答が多いのが「効率改善」、続いて「ビジネスプロセスの最適化」となっており、3 位である「コンプライアンス」を上回っている。これは、生産性向上に ECM を活用しようという意識のあらわれであると述べた。

今後、日本は少子高齢化による経済規模の縮小はまぬがれないため、一人あたりの生産性を高める必要があること、日本の IT 投資は ECM など人間系情報(非構造化情報)へのマネジメントが少ないことを挙げ、日本における ECM 推進の重要性と ECM による生産性の向上が重要だと訴えた。

本ホワイトペーパーの記載内容について無断転載を禁じます。  
全ての著作権は社団法人 日本画像情報マネジメント協会に帰属します。

レポート:

株式会社テクノ・システム・リサーチ

浅沼 邦明

<http://www.t-s-r.co.jp/>

文責:

社団法人 日本画像情報マネジメント協会

ECM 委員会

<http://www.ecm-portal.jp/>